


受賞者氏名	下吹越武人	
所属	デザイン工学部	
受賞年月日	①2020/4/15 ②2021/2	
国内・国外	国内	
授与機関等名称	①日本建築学会 ②一般社団法人東京都建築士事務所協会	
受賞名	①2020年日本建築学会作品選奨 ②第46回東京建築賞 戸建住宅部門最優秀賞	
受賞(研究)内容詳細	<p>私の研究分野は建築デザイン・建築設計です。「建築は都市をつくる」というテーマの下、単体としての建築と、暮らしの集合知として結晶化したようなボトムアップ型都市を両方向から分析し、私たちの豊かな社会のあり方と新しい生活の価値観の創造を目指して研究を行っています。人を惹き付ける空間構成と心地良い環境形成を統合した建築を街に開いて連関させることで、生き生きとした都市空間をつくれるのではないかという構想の下、フィールドワークや建築設計の実践を通して、そうした優れた建築の在り方を追求しています。</p> <p>庭を纏う</p> <p>この度受賞した住宅『K2 house』ではまず庭をつくりたいと思いました。庭はとても個人的な場所です。勝手気ままに花木を植え、物をつくり、飾る。個人的な興味や嗜好の一片が脈絡なく堆積し、濃密な私空間として場を形成します。玄関先に並べられた大小のプランター群も住人の嗜好が集積する小さな庭空間です。</p> <p>住宅地を観察すると庭は私空間であるにもかかわらず、空間的に閉じず、街と繋がっています。住宅からはみ出して隙間を埋め尽くすように周囲に広がり、住宅本体よりも庭の連なりが主導して街並みをつくっています。表から見える部分だけでなく、裏側にそっと植えられた花木やきれいに並べられた用具から、暮らし方に対する気品や誇りが垣間見えたりします。住人の個人性が現れる庭が街全体の生活環境の質を担保しているように感じるのです。</p> <p>暮らしの場を自分らしく整え、表に現すことは、自身と生活をその場所に定着させるための社会的な振る舞いなのかも知れません。庭を構えることは街という共同体への参加表明でもあり、庭の連なりは人間らしい暮らしの風景をつくるだけでなく、暮らし方の多様さを許容する共同性の現れでもあります。その連関によって、個人の生活領域が街と地続きで繋がっていくのではないのでしょうか。『K2 house』を設計するにあたり、新しい土地に暮らし始める構えとして、個人性と街への拡張性が共存する庭を纏った住宅がふさわしいのではないかと考えました。</p> <p>3つの〈ニワ〉が生み出す光の斑</p> <p>敷地は大規模な都市開発による開放的な街区と旧来の木造密集住宅地の境界上に位置しています。街区側は行き交う人々と保育園や公園の賑わいによる活気に溢れていて、住宅地側は隙間を縫うように小さな空地の緑が連なり、光や風の抜け道として網目のように広がっています。これらのさまざまな周辺環境への接点として設けた3つの〈ニワ〉がこの住宅の特徴です。</p> <p>三角形という特殊な敷地形状のため、中央に諸室をコンパクトにまとめた四角いボリュームを置き、周囲を3つの三角形〈ニワ〉で囲む構成としました。三角形という形態的特徴と狭隘道路に囲まれた施工条件を考慮し、柱や梁の数を極力減らした立体的な架構によって中央のボリュームを軽やかに持ちあげ、内外が交じり合うように繋がる一室空間を創出しました。</p> <p>3つの〈ニワ〉は半屋外のような空間で太陽の動きに合わせて光の斑をつくり</p>	

だします。室内に陽だまりが点在し、時には〈ニワ〉が外より明るかったりします。光の斑によって内外の境界は曖昧になり、空間に不思議な奥行きと広がりが生まれます。住まいの中に多種多様な場所がつくられ、過ごし方も季節や天候に合わせた選択性が得られます。ご飯を食べたり、本を読んだり、くつろいだり、デスクワークする場所が、日によって変わります。そして、外部と連続的な空間性によって自然に意識が住宅を超えて地域へと拡張していきます。

#### 住宅の硬い殻を開く

現代の住宅はプライベートな空間という共通認識の下にプライバシーという硬い殻で閉じています。そのため、社会との関連が希薄になりがちで、環境という視点が室内の問題に狭小化してしまう傾向があります。しかし、住宅から環境を考えるということは、個人が地域や社会とどのように関わりながら暮らしていくのかという、生活環境の根幹に関わる問題に向き合うことです。地域の中で生活の場を築くということは、生活の中に様々な外的要因を引き込むこととなります。他者が介在することで暮らしが充実したり、時には思いがけず困惑したりすることもあるでしょう。しかし、地域との関わりへの蓄積は新しい豊かさや生き甲斐を醸成し、生活がその場所に根を張るように定着していくのではないかと考えます。「人と環境と住空間」を包括的に捉えるということは、ひとりの人間と地域社会の関係を捉え直す古くて新しいテーマであり、先人が培ってきた多様で雑多な暮らしの文化を次の世代へと継承する試みです。今後も建築デザインを通してその探求を続けていきたいと考えています。



K2 house\_外観全景 (撮影：小川重雄)